ヴァスバンドゥは分別（vikalpa）を三種類と見なすか

——スティラマティとヤショーミトラの解釈——

箕　浦　暁　雄

1　問題の所在

『倶舎論』（*Abhidharmakośabhāṣya*）という書物を仏教思想史上に位置付けようとする試みは，ヴァスバンドゥ（Vasubandhu）による説一切有部（Sarvāstivādin）批判の脈絡をどう読み解くかにかかっている。

現代のアビダルマ研究の歴史を振り返るなら，荻原雲来の校訂によって比較的早くから参照することができたヤショーミトラ（Yaśomitra）の注釈『倶舎論明瞭義』（*Sphuṭārthā*）サンスクリットテクストに基づいて捉えられてきた『倶舎論』理解は，今日に至ってはさらにスティラマティ（Sthiramati）の注釈書『倶舎論実義疏』（*Tattvārthā*）によって検討し直しておく必要がある。

ヤショーミトラが，ヴァスバンドゥの著作『五蘊論』（*Pañcaskandhaka*）の一節を引いて『倶舎論』におけるヴァスバンドゥの見解を解説する箇所があることはよく知られている。そこには，『倶舎論』に見られる経量部（Sautrāntika）ヴァスバンドゥの立場，あるいは瑜伽行派（Yogācāra）ヴァスバンドゥの立場が表明されていると，これまでの研究によって理解されてきた。(1)

『五蘊論』の記述を根拠にヤショーミトラがヴァスバンドゥの見解を説明する場合，その同じ『倶舎論』の記述をスティラマティがどのように読み解くかについて，筆者は先に『倶舎論』第２章「根品」における十大地法の共存可能性をめぐる議論を検討したことがある。(2) それに引き続き，本稿は，ヤショーミ

トラの注釈による我々の『倶舎論』理解を，スティラマティの注釈によって再検証しておく必要があるという問題関心に基づく。ヴァスバンドゥの思想的立場について結論を急ぐことなく，ここでは仏教の基礎概念である分別（vikalpa）を三種に分類する説一切有部説に言及する『倶舎論』の記述に注目し，スティラマティとヤショーミトラがどのように注釈するか精査しておきたい。

2　『倶舎論』における三種類の分別

説一切有部は，分別（vikalpa）を，自性（svabhāva）・計度（abhinirūpaṇa）・随念（anusmaraṇa）分別の三つに分類する。この分類は，『倶舎論』以前の説一切有部アビダルマ文献のうち，いわゆる六足論や『発智論』には見られない。それはまず『大毘婆沙論』において確認することができる。(3)

ところが『倶舎論』では「分別は三種類であると伝承する」と述べられ，説一切有部説の提示に「伝承する」（kila）という伝聞表現が添えられている。周知の通り，『倶舎論』の中ではこの「伝承する」（kila）という語が往々にして説一切有部学説批判の意を込めて用いられる。(4) このことから，この場合もヴァスバンドゥは分別を三種類に分けるこの説一切有部説を容認しないと了解されてきた。『倶舎論』は，以下のように三種類の分別についての説明を開始する。(5)

> もし五つの識の集合（五識身）が尋を持つものであり伺を持つものであるならば，どのようにして分別を欠いていると言われるのか。
>
> 計度〔分別〕と随念分別に関しては，分別を欠いている。（33ab）
>
> 分別は三種類であると伝承する。自性〔分別〕と計度〔分別〕と随念分別とである。さて，これら（五つの識の集合）には自性分別はあるが，他〔の二つの分別〕はない。それ故に「分別を欠いている」と言われる。あたかも一本足の馬は「足がない」というようにである。そ〔の三種類の分別〕のなかで，自性分別は尋である。それ（尋）は，後に心所のなか（第２章「根品」）で説示されるであろう。

この一節は，十八界の諸門分別で取り上げられるものである。十八界に包摂される六識のなかの意識は三種類の分別をすべて有するが，前五識（眼・耳・鼻・舌・身識）は自性分別のみを持ち計度分別と随念分別とを欠く。三種類の分別すべてを欠くわけではないにせよ，「分別を欠いている」と第33偈で述べる理由を説明したことになる。

3　ヤショーミトラの解釈

兵藤一夫（2002）が指摘する通りであるなら，『倶舎論明瞭義』という注釈書は，自らの立場を経量部師と称するヤショーミトラが『倶舎論』を読み解く場合に経量部師としての『倶舎論』の読み解き方を示して見せたものであるということになる。

『倶舎論』におけるヴァスバンドゥの立場を検討するために，インドの地平において『倶舎論』を捉える手掛かりとして最もよく参照されてきたヤショーミトラの注釈書をまず確認しておきたい。

> **分別は三種類であると伝承する**という，「**伝承する**」の語は他者の見解を顕すためである。いっぽう，〔ヴァスバンドゥ〕自身の意図は，尋は思・慧の差別にすぎず，自性分別という別のダルマがあるのではない，と〔いう点にある〕。すなわち，この者によって『五蘊論』のなかで〔次のように〕説かれている。「尋とは何か。尋求する意言であり，思・慧の差別であり，心の粗さ（麁）である。伺とは何か。同じく尋求する意言であり，心の細かさ（細）である」。思考しない位相では思，思考する位相では慧，と設定される。

ヤショーミトラが引く『五蘊論』の一節は，近年新たに現存が確認された『五蘊論』サンスクリット写本の文章と一致する。(6) ヴァスバンドゥが自性分別という個別のダルマの設定を認めないことを，ヤショーミトラの注釈は明言する。『五蘊論』を引いてその根拠とすることから，少なくともここでは瑜伽行

派と説一切有部との学説体系の枠組みの相違こそ，『倶舎論』のこの一節を読み解くときの鍵であるとヤショーミトラが見なしていることを意味している。そうであっても，ヤショーミトラのこのような注釈態度によって，『倶舎論』におけるヴァスバンドゥ自身の思想的立場が瑜伽行派であると結論付ける必要は必ずしもない[(7)]。また，『倶舎論明瞭義』のこの主題のもとでは，これが経量部の見解であると明記されるわけではない。ヤショーミトラは，異なった教義学説があることを承知していて『倶舎論』の読み解き方を示してみせた。今はこのことを確認するに留め，この一節のみによってヴァスバンドゥの思想的立場を判断することは避けておこう。

4　スティラマティの解釈

4.1　北京図書館所蔵の敦煌漢文『倶舎論実義疏』第三巻

まず，およそ９～10世紀に書写されたものであろうと見なされている北京図書館（現 中国国家図書館）所蔵の敦煌漢文『倶舎論実義疏』第三巻（L3736, 北新1445）を引いておこう。蘇軍校訂本のまま以下に記す[(8)]。

論曰：傳説分別略有三種：一自性分別，二計度分別，三隨念分別。由五識身雖有自性而無餘二，説無分別。如一足馬名爲無足。

釋曰：此中何以爲傳説？　言經部宗無自性分別，如《五蘊論》云：尋云何？　謂心有尋求，是思慧之差別。此中意説，離心之外，無別尋體。三分別中，經部不許自性分別，由斯故置“傳説”之言。或餘處説八種分別，今此説三，論主不許，故云“傳説”。八種分別者，一自性，二差別，三總執，四義，五我所，六愛，七非愛，八彼俱相違。釋此名義，如《對法》第二、三分別中。五識唯有自性分別，而無計度、隨念分別。唯一分別，名無分別。如一匹馬，無其三足，唯有一足，無行歩用，亦名無足。五識亦爾。（太字は玄奘訳『倶舎論』本文）[(9)]

この北京図書館所蔵敦煌漢文『倶舎論実義疏』第三巻は，まず『倶舎論』本

文をそのまま引いてから，「釋曰」と言って注釈を付す。ここに引かれる『倶舎論』本文は玄奘訳と完全に一致する。

ここでは，「傳説」(kila) の語が用いられる理由を二通りの仕方で説明する。第一に，『五蘊論』を根拠にして，自性分別を立てる説一切有部説を認めないから，「傳説」の語を置くと説明する。『五蘊論』を根拠とするのはヤショーミトラの注釈と同様である。ただし，『五蘊論』を根拠としながら「經部宗」という名称を持ち出す点には注意しておきたい。後に触れるが，サンスクリット原典，チベット語訳，フランス国立図書館所蔵敦煌漢文『倶舎論実義疏』は，いずれも『五蘊論』を根拠として引用しないし，「経量部」という名称にも言及しない。

第二に，分別を八種に分ける解釈を引き合いに出し，分別を三種に分類する説一切有部説に異論を唱えているからであると説明する。

このように分別を八種に分けるのは『瑜伽論』(*Yogācārabhūmi*)「菩薩地の真実義品[10]」や『顕揚聖教論』「成無性品」などに見られる解釈である。『瑜伽論』に従って八種類の分別を以下に示しておこう（丸括弧内は『瑜伽論』玄奘訳語[11]）。

1．svabhāvavikalpa（自性分別）

2．viśeṣavikalpa（差別分別）

3．piṇḍagrāhavikalpa（總執分別）

4．aham iti vikalpa（我分別）←北京図書館所蔵敦煌漢文『倶舎論実義疏』は「義」と記す。

5．mameti vikalpa（我所分別）

6．priyavikalpa（愛分別）

7．apriyavikalpa（非愛分別）

8．tadubhayaviparīto vikalpa（彼俱相違分別）← tad は priyāpriya を指す。

「真実義品」のこの箇所では，凡夫たちには真如（tathatā）が正しく理解されず，“vastu”が生み出され，有情世間・器世間を形成する分別が生起することを説明して，以上八種類の分別が列挙される[12]。

先に引いた『倶舎論実義疏』に示されていた「傳説」の語を置く第二の説明

に立ち返ろう。分別を三種に分けるにせよ，八種に分けて解釈するにせよ，いずれにも自性分別の概念は立てられる。よって，ヴァスバンドゥが三種分別を認めないのは，八種分別という別の分類があるからであって，自性分別すなわち尋のダルマを立てること自体に異論を唱えているのではないということになる。

ウイグル文と漢文の『倶舎論実義疏』の関係を考察した庄垣内正弘（2008）は，当該ウイグル文が『倶舎論実義疏』の講義録に近い一面を持つと言えるかもしれないと慎重に私見を述べる。[13] サンスクリット原典やチベット語訳とは異なり，北京図書館所蔵の当該漢文は，「頌曰」「論曰」「釋曰」，あるいは「經部云」「阿闍梨衆賢云」などの語を逐一置いてそれに続いて各々の文章を引く。文章の形式や議論の立場を明確に掲げて注釈文を記すこのような点をも考慮すると，ウイグル文同様にこの北京図書館所蔵の敦煌漢文『倶舎論実義疏』もまた，原典の翻訳というより講義録というべき性格の文献であるかもしれない。ともかく，『倶舎論実義疏』における実に複雑な議論の文脈をより明確に捉えようとして原典にない記述を加えていることは間違いない。

4.2　フランス国立図書館所蔵の敦煌漢文『倶舎論実義疏』

ところで「八種分別」の語は，原典と比べて極めて短い節略本として知られるフランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France）所蔵の敦煌漢文『倶舎論実義疏』（五巻本／『大正新修大蔵経』所収　No.1561）にも見出される（Taisho29 326c20-21　論曰。説分別略有三種。一自性分別。二計度分別。三隨念分別。由五識身雖有自性而無餘二。説有八種分別非也？。唯有自性分別。而無計度隨念分別。唯一分別名無分別。）。内容上さらに検討すべきことはないが，今はこれがいかなる文献であるのか見極めるために注目しておけばよい。

4.3　チベット語訳『倶舎論実義疏』

現存するチベット語訳は15から16世紀にダルマパーラバドラ（Dharmapālabhadra）によって翻訳されたもので，大蔵経の雑部に収められている。不完全な訳と言

われるが，三種分別の注釈文は，近年現存することが確認されたポタラ宮所蔵『倶舎論実義疏』サンスクリット写本と一致する。[14]

『倶舎論実義疏』諸本のうち，『五蘊論』が引かれ，経量部の名が見られるのは，北京図書館所蔵敦煌漢文のみである。いっぽう，「八種類の分別」（rnam par rtog pa rnam pa brgyad）の語はチベット語訳中に認められる（TA Peking to 113a6 rmam par rtog pa rnam pa brgyad thugs la bzhag nas gzhan du grag go'i sgra rab tu sbyar te / **rnam par rtog pa ni rnam pa gsum mo** zhes grag go zhes so // 太字は『倶舎論』本文）。確かにこの点サンスクリット写本と一致するので，『倶舎論実義疏』諸本いずれにもこの八種分別の言及があることになる。チベット語訳を参照すると，八種分別という分類を引き合いに出して，三種分別とは別の解釈例があるから「伝承する」（kila）という語が添えられたと説明しているにすぎないように思われる。

チベット語訳とサンスクリット原典には「心の粗さ故に，自性分別は尋であり，推求を自体とするからであると，師サンガバドラは〔言う〕」とサンガバドラの発言が引かれる。[15]『大毘婆沙論』には，尋と伺とは心そのものに他ならないという譬喩者の主張に対して，尋と伺というのは心とは別の心所法であるとの反論がなされて，尋と伺との自性が示される。[16]サンガバドラの発言は，この『大毘婆沙論』以来の議論を想起させるが，スティラマティは，尋を個別のダルマとして設定する説一切有部説批判を意図してサンガバドラの見解を引くわけではない。

さて，対応するプールナヴァルダナ（Pūrnavardhana）の『倶舎注疏随相』（*Lakṣaṇānusārinī*）には「伝承する」（kila）の語は引かれないが，分別を三種に分類するのはヴァイバーシカ（Vaibhāṣika）の説であると注釈される（LA Peking ju 76b7 **rnam par rtog pa ni rnam pa gsum mo** zhes grag ste zhes bya ba la / grag ste'i sgras ni bye brag tu smra ba'i tshig yin par ston to // 太字は『倶舎論』本文）。ここには，八種分別の言及も『五蘊論』の引用もなく，経量部の名も持ち出されない。三種分別という解釈例を一つの伝承として言及したまでで，説一切有部説に対する異論は差し挟まれないと了解しておいてよい。

5 まとめ

以上，「分別は三種類であると伝承する」という『倶舎論』の記述に限ってではあるが，スティラマティとヤショーミトラの注釈文を検討した。

『順正理論』を参照すると，「傳説」(kila) の語は置かれず，単に「分別有三」と述べて，三種類の分別が列挙されるにすぎない。ここで，経主ヴァスバンドゥは批判されない。なお『順正理論』当該文は『顕宗論』と完全に一致する。[17]

ここで，整理しておこう。先に確認した通り，ヤショーミトラは『五蘊論』を根拠として自性分別の設定そのものをヴァスバンドゥが認めないと明言する。それに対して，少なくとも『倶舎論実義疏』チベット語訳（サンスクリット原典も同様）によれば，分別を八種に分類する解釈例があるから，ただそのような解釈の伝承をスティラマティは認めるにすぎない。スティラマティが三種分別に異論を差し挟む意図で八種分別に言及すると読み解こうとしても，分別の概念を八種類に分ける場合にもその中には自性分別が立てられるので，八種分別の学説それ自体は自性分別を認めないことの根拠にならない。つまり，分別を八種に分けて説明する仕方は確かに瑜伽行派で伝えられてきた解釈であるが，この場合は積極的な説一切有部批判の根拠とならない。よって，この注釈文に限って言えばスティラマティは自性分別の設定を容認しないと述べているわけではないことになる。結局，スティラマティとヤショーミトラ両注釈の最大の相違点は，尋というダルマに関係して自性分別の設定を容認するか否かにある。

ところで，『倶舎論』の中で起こる議論は，時代を経るに従って見解の相違がより鮮明になるよう，各々の立場を明確化する方向に整理され受け取られてきた傾向があるように思われる。もともと『倶舎論』本論や注釈書で，単に異なった見解が列挙されたにすぎなかったとしても，その文脈を読み解くのに，対立する立場を鮮明にしておいてその異なった見解を提示すればより把握しやすい。

例えば，日本の倶舎学の伝統的注釈として名高い佐伯旭雅の『冠導阿毘達磨

倶舎論』は「傳説」(kila) の語について注記を加え，尋と伺は心と別ではないとの経量部の見解をヴァスバンドゥは持つと述べる。[18] あるいは，法宣の『倶舎論講義』(1852年講述，1898年刊行) は，この箇所の読み方として二つの説があると言う。第一の説では，ヴァスバンドゥによる不審表明ではなく，ヴァイバーシカたちの伝承であることを示すために「傳説」と述べたことになると説明する。第二の説によると，経量部の見解に基づき不審を表明するためにヴァスバンドゥは「傳説」と述べたことになると言う。そして，後説が勝っていると言及する。[19]

すでに北京図書館所蔵敦煌漢文が書写された時代の伝承において，尋と伺のダルマを設定するか否かの議論と関係して，三種分別を主題とする場合にも「経量部」の見解という立場が記されている。そして，後の法宣の『倶舎論講義』においても，「伝承する」(kila) の語が諸々の伝承の提示にすぎないとの説を示しながらも，尋と伺をめぐる議論と関係して経量部という立場を明確に記している。これらは，『倶舎論実義疏』サンスクリット原典やチベット語訳が当該注釈文では尋と伺のダルマ設定の是非を問わないのに，また経量部という名称を記さないのに，時代を経るに従って対立軸が明確になるよう収め取られてきたことを表していると言えよう。

＊本稿は，2010年７月15日に開催された大谷大学仏教学会研究発表例会の口頭発表に基づく。口頭発表の後，『倶舎論実義疏』チベット語訳に八種分別が引き合いに出されることを指摘の上，この点に十分注意すべきであることを宮下晴輝教授よりご指摘頂き，また『倶舎論』のなかで kila の語が記される箇所をどのように読み解くべきかについて兵藤一夫教授から貴重なご意見を頂いた。ここに記して感謝致します。

注

(1) 例えば，『倶舎論』における十大地法の共存に関する議論に言及する西村実則 (2002) は，経量部の立場から説一切有部説を批判すると『倶舎論』を読み解く (pp.121-124)。この問題については箕浦暁雄 (2003) ですでに取り上げた。

また，「分別は三種類であると伝承する (kila)」という『倶舎論』の記述について言えば，それに注目する松本成裕 (1995) は，ヤショーミトラの注釈書を手掛かりに，ヴァスバンドゥが尋と伺を特殊な思と慧であると見なすことを確かめ，その

根拠として引かれる『五蘊論』の一節が『唯識三十頌釈』や『瑜伽論』と一致することを確認している。『倶舎論』著述時におけるヴァスバンドゥは瑜伽行派の学匠であると了解し，瑜伽行派であるという自らの思想的立場を，原田和宗氏の言葉を借りるなら「隠蔽」するために「経量部」という学派名を用いると考える原田和宗（1998）は，自身のそれに先立つ研究（同1998注４，５参照）を経て，松本成裕（1995）等の論考を受け，尋・伺の心所に関する経量部の見解を瑜伽行派の文献のうちに見定めようとする。なお，必ずしも原田和宗（1998）のように説明する必要がないと主張する兵藤一夫（2002）のような『倶舎論』の読み解き方に十分注意しておきたい。

もっとも『倶舎論』に見られるヴァスバンドゥによる説一切有部批判の根拠が『瑜伽論』など瑜伽行派の論書に求められることは，それ以前からよく知られてきた。これを最初に明確に提示したのはおそらく向井亮（1972）そして宮下晴輝（1986）である。両研究はどちらも三世実有説の議論を取り上げたものである。その後『瑜伽論』のなかに『倶舎論』における説一切有部批判の根拠が見出されることが他の研究者によって繰り返し確認され，他の議論においても同様に『瑜伽論』に説一切有部批判の根拠が見出されると指摘されてきた。『倶舎論』と『瑜伽論』との関係を探る研究として袴谷憲昭（1986）も前述の二者同様に重要である。

ただ，向井亮（1972）や宮下晴輝（1986）以降の研究の多くは，経量部の立場が『瑜伽論』に代表される瑜伽行派の立場とどれほど近くまたどれほど遠いかという議論に終始しているようにも思われる。瑜伽行派なる名称は大きく思想史を捉えて言う際には便利であるが，瑜伽行派の学説自体が時代を経て展開している様相を正確に捉えようとする兵藤一夫（2010）の指摘によりいっそう注意を向けるなら，何を指して瑜伽行派の立場であると言明するのかは常に明確にしておかなければならない。『倶舎論』で経量部という名称を持ち出して議論がなされるということは，何を意図しての問題提起なのか，引き続き今後の課題としておきたい。

(2) 箕浦暁雄（2003）参照。

(3) 『大毘婆沙論』Taisho27 219b7-23 此中略有三種分別。一自性分別謂尋伺二隨念分別謂意識相應念三推度分別謂意地不定慧。欲界五識身唯有一種自性分別。雖亦有念而非隨念分別不能憶念故雖亦有慧而非推度分別不能推度故。欲界意地具三分別。初靜慮三識身唯有一種自性分別。雖有念慧非二分別義如前説。初靜慮意地若不定者具三分別若在定者有二分別。謂自性及隨念雖亦有慧而非推度分別若推度時便出定故。第二第三第四靜慮心若不定者有二分別謂隨念及推度除自性。彼無尋伺故。若在定者唯有一種隨念分別。無色界心若不定者有二分別除自性。若在定者唯有一種隨念分別。諸無漏心隨地不定。有但有分別者謂除推度有唯有一分別者謂隨念。無具三者無不定故。

(4) 『倶舎論』の偈に kila と記される用例については，加藤純章（1989）が詳細に検討している（pp.17-32）。しかし，偈以外の散文の中で用いられる場合については，検討し尽くされているわけではない。本稿で取り上げる箇所についても言及はない。具体例は示されないが，kila の語が偈において用いられる場合には説一切有

部説批判を意図しているが，散文における用例すべてが説一切有部説批判を示すためのものとは考えにくいとの櫻部建博士の指摘があることは，すでに箕浦暁雄（2003）注4に触れた。後に記すが，法宣『倶舎論講義』は，ここにおける「傳説」（kila）の語には，ヴァイバーシカの伝承であるとの言及にすぎないという解釈と，ヴァスバンドゥによる不審を表す解釈とがあると言及する。

(5) 『倶舎論』第1章「界品」Pradhan 22.18-22; Ejima 35.3-9 yadi pañca vijñānakāyāḥ savitarkāḥ savicārāḥ katham avikalpakā ity ucyante /

nirūpaṇānusmaraṇavikalpenāvikalpakāḥ / (33ab)

trividhaḥ kila vikalpkaḥ / svabhāvābhinirūpaṇānusmaraṇavikalpaḥ / tad* eṣāṃ svabhāvavikalpo 'sti / netarau / tasmād avikalpakā ity ucyante / yathaikapādako 'śvo 'pādaka iti / tatra svabhāvavikalpo vitarkaḥ / sa caitteṣu paścān nirdekṣyate / (*Wogihara 64.29: tad iti vākyopanyāse nipātas tasmādarthe vā /)

(6) 『倶舎論明瞭義』SA Wogihara 64.23-28 **trividhaḥ kila vikalpka** iti / **kila**śabdaḥ paramatadyotanārthaḥ svābhiprāyas tu cetanāprajñāviśeṣa eva vitarka iti na svabhāvavikalpo 'nyo dharmo 'stīti / tathā hy anena paṃcaskandhaka uktaṃ / vitarkaḥ katamaḥ / paryeṣako manojalpaḥ / cetanāprajñāviśeṣaḥ yā cittasyaudārikatā / vicāraḥ katamaḥ / paryeṣako manojalpas tathaiva yā cittasya sūkṣmatā / anabhyūhāvasthāyāṃ cetanā abhyūhāvasthāyāṃ prajñeti vyavasthāpyate /『五蘊論』Li & Steinkellner 13.7-10 vitarkaḥ katamaḥ / pratyavekṣako manojalpaś cetanāprajñāviśeṣaḥ / yā cittasyaudārikatā / vicāraḥ katamaḥ / pratyavekṣako manojalpas tathaiva / yā cittasya sūkṣmatā //『五蘊論』サンスクリット写本の校訂本については，書評　箕浦暁雄（2009）参照。

(7) 兵藤一夫（2002）p.331 参照。

(8) 敦煌漢文『倶舎論実義疏』第三巻 Su Jun 235.19-236.7　蘇軍校訂本は本文にてカンマと読点とを使い分けている。

(9) 『倶舎論』玄奘訳 Taisho29 8b2- 5

(10) 『瑜伽論』菩薩地・真実義品の校訂ならびに翻訳研究 BBh Wogihara pp.50-52, Dutt pp.34-36, Willis pp.125-131, 相馬一意（1986）pp.118-120 参照。これらを受け新しい校訂・和訳研究に高橋晃一（2005）pp.107-110, pp.170-174 がある。

(11) 八種分別については以下参照のこと。『瑜伽論』（No.1579）Taisho30　489c9-490b1;『顕揚聖教論』（No.1602）Taisho31　558b10-c13;『三無性論』（No.1617）Taisho31　869b9-870a29　『三無性論』に見られる八種分別については，宇井伯寿（1930）参照。

(12) 八種分別について，とりわけ自性分別について言及する研究，御子上恵生（1964），池田道浩（1999）参照のこと。

(13) 庄垣内正弘（2008）pp.30-31

(14) チベット語訳については，江島恵教（1986）参照のこと。現在，小谷信千代博士を代表に，本庄良文教授，秋本勝教授，松田和信教授，福田琢教授に筆者も加わり，ラサのポタラ宮所蔵『倶舎論実義疏』サンスクリット写本の解読に取り組んでいる。

現段階では，ここに原文を提示することはかなわないが，筆者が確認した限り当該箇所についてはおおよそチベット文と対応することのみここに報告しておく。

残念ながら現存するウイグル文『倶舎論実義疏』三本（ロンドン本，甘粛本，北區石窟本）は，共に対応箇所を欠く。庄垣内正弘（2008）掲載のウイグル文と漢文との関係図（p.86）参照。チベット語訳からのモンゴル語訳があるが，解読研究は皆無である。筆者が知る限り，唯一庄垣内正弘（2008）にウイグル文やチベット文との関係についての貴重な指摘がある（pp.17-31）。

(15) TA Peking to 113a8-b1

(16) 『大毘婆沙論』Taisho27 218c26-219b23

(17) 『順正理論』Taisho29 350b7-12 論曰。分別有三。一自性分別。二計度分別。三隨念分別。由五識身雖有自性而無餘二。説無分別。如一足馬名爲無足。故雖有一而得名無。豈不意識有唯一種分別相應。由依意識總類具三。説有分別。自性分別體唯是尋。後心所中自當辯釋。『顕宗論』Taisho29 788b15-20 参照。

(18) 佐伯旭雅『冠導阿毘達磨倶舎論』（法蔵館，1978 年）p.60 論主意信経部尋伺即心又唯意識不信薩婆多尋伺別体倶生及六識相應故云。

例えば，中国の注釈，普光の『倶舎論記』（光記）や法寶の『倶舎論疏』（寶疏）には，この箇所の「傳説」の語について特別何も注記されない。

(19) 法宣『倶舎論講義』（櫻井寶鈴編，四書館，1898 年）207.6-208.3 近來二説アリ。一ニ論主是レハ不審ヲ表スル言ニアラズ。此ノ三種ノ分別ハ是レ毘婆娑師ノ傳來相承ノ説ナリト云フコトヲ顕シテ傳説トノ玉フト云云。二ニ是レハ論主不審ヲ表スル言トスル。此ノ二説ノ中，後説ガ勝ルル。全体此ノ尋伺ノ心所ニ有部ト經部ト爭ノアルコトデ，ソノ爭ヒハ此論四（十二丁右）ニ出ヅ倩ヲ今爰ノ明シ方ヲ案ズルニ，三種分別ヲ判ズル其ノ首ニ傳説ノ言ヲ置テ，次ニ自性分別乃至後心所ノ中自ラ「當辨釋」ト第四卷ニ讓テアリ。是レ勝負ハ追テト云フ明シ方ナリ。爾レハ不審ヲ表スル言ニ違ナシ。故ニ正理ニハ傳説ノ言ヲ除ヒテアリ。（断りなく原文を訂正した箇所がある。）

文献

BBh Wogihara　Wogihara, U., ed., *Bodhisattvabhūmi,* Sankibo Buddhist Book Store, Tokyo, 1930-1936, repr. 1971.

Dutt　Nalinaksha Dutt ed., *Bodhisattvabhūmiḥ: Being the XVth Section of Asaṅgapāda's Yogācārabhūmiḥ,* K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1978.

Ejima　Ejima, Yasunori ed., *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu ChapterI: Dhātunirdeśa,* The Sankibo Press, Tokyo, 1989.

LA Peking　*Lakṣaṇānusārinī* Peking No.5594

Li & Steinkellner　*Vasubandhu's Pañcaskandhaka,* Critically Edited by Li Xuezhu and Ernst Steinkellner with a Contribution by Toru Tomabechi, China Tibetology Publishing House, Beijing, Austrian Academy

of Sciences Press, Vienna, 2008.
Pradhan　Pradhan, P., ed., *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu,* Tibetan Sanskrit Works Series Vol.VIII, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1967.
SA Wogihara　Wogihara, U., ed., *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā,* Sankibo Buddhist Book Store, Tokyo, 1936.
Su Jun　蘇軍「阿毗達磨倶舎論實義疏」（方廣錩 主編『藏外佛教文獻』第一輯，宗教文化出版社，1995年）
TA Peking　*Tattvārthā Abhidharmaśabhāṣyaṭīkā.* Peking No.5875.
Taisho　高楠順次郎・渡邊海旭 監修，小野玄妙 編『大正新修大蔵経』大蔵出版，東京，1924-1932年.

池田道浩　「瑜伽行派における自性分別と無分別智」『駒澤短期大学仏教論集』No.5, 1999年.
宇井伯寿　「三無性論の研究」『印度哲学研究』甲子社書房，1930年（再版　岩波書店，1965年）
江島恵教　「スティラマティの『倶舎論』註とその周辺――三世実有説をめぐって――」『仏教学』19号，1986年.
加藤純章　『経量部の研究』春秋社，1989年.
庄垣内正弘　『ウイグル文 アビダルマ論書の文献学的研究』松香堂，2008年.
相馬一意　「「菩薩地」真実義章試訳」『南都仏教』No.55，1986年.
高橋晃一　『『菩薩地』「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開――vastu 概念を中心として――』山喜房仏書林，2005年.
西村実則　『アビダルマ教学 倶舎論の煩悩論』法蔵館，2002年.
袴谷憲昭　「Pūrvācārya 考」『印度学仏教学研究』34-2，1986年.
原田和宗　「言語に対する行使意欲としての思弁（尋）と熟慮（伺）――経量部学説の起源（1）――」『密教文化』199/200，1998年.
兵藤一夫　「経量部師としてのヤショーミトラ」『初期仏教からアビダルマへ：櫻部建博士喜寿記念論集』平楽寺書店，2002年.
――――　『初期唯識思想の研究――唯識無境と三性説――』文栄堂，2010年.
松本成裕　「尋伺に関する一考察――瑜伽師地論意地を中心にして――」『佛教大学大学院紀要』No.23，1995年.
御子上恵生　「菩薩地における自性分別」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第三集，1964年.
箕浦暁雄　「スティラマティとヤショーミトラの大地法理解」『印度学仏教学研究』52-1，2003年.（Sthiramati and Yaśomitra: On the Possibility of Co-existence of Mental Dharmas Described in the Two Commentaries on the *Abhidharmakośabhāṣya,* XVth Congress of the International Association of Buddhist Studies, 2008. 口頭発表）

——— 書評 *Vasubandhu's Pañcaskandhaka,* Critically Edited by Li Xuezhu and Ernst Steinkellner with a Contribution by Toru Tomabechi『仏教学セミナー』No.89, 2009年.

宮下晴輝 「『倶舎論』における本無今有論の背景——『勝義空性経』の解釈をめぐって——」『仏教学セミナー』No.44, 1986年.

向井 亮 「『瑜伽論』に於ける過去未来実有論に就いて」『印度学仏教学研究』20-2, 1972年.

Willis, Janis Dean *On Knowing Reality: Tattvārtha Chapter of Asaṅga's Bodhisattvabhūmi,* Columbia University Press, 1979, repr. Motilal Banarsidass, 1982.

本稿は平成22年度科学研究費補助金（基盤研究（B））による研究成果の一部である。